

大東文化大学

東洋研究所所報

2014.6 No.61

目次

東洋研究所35年—研究所は大学の「アクセサリー」、「サロン」？ …………… 岡崎 邦彦… 1	2014年度 東洋研究所公開講座案内…………… 7
〔国際交流講演会〕東京裁判：歴史の犯罪化 駐日アイルランド大使館二等書記官 エリオット・ミルトン… 3	東洋研究所出版目録…………… 8
2014年度 東洋研究所共同研究課題…………… 4	人事・名簿…………… 10
2013年度 東洋研究所共同研究班活動報告…………… 6	東洋研究所の理念・目的…………… 11
	2013年度 東洋研究所会議報告…………… 11
	新刊案内…………… 12

東洋研究所35年—研究所は大学の「アクセサリー」、「サロン」？

東洋研究所准教授 岡崎 邦彦

私は1978年に東洋研究所へ助手として入所した。昨年、勤続35年となり、大学から永年勤続表彰をうけ、記念品を頂いた。これひとえに諸先輩、同僚をはじめとする学園教職員の支えによるものであり、心から感謝している。ここに研究所のこれまでを振り返り、私学における研究所のあり方について愚見を申し述べたい。

東洋研究所の起源は、1920年（大正10年）の貴族院、衆議院両院における『漢学振興に関する建議案』決議まで遡る。この決議の基本理念は、東西文化融合による世界の新たな文化発展に貢献することにあった。東洋文化を代表する漢学が、明治維新以来衰退しつつあり、我が国が文化的使命を達成するには、漢学を中心とする東洋学術研究が急務と考えられたからである。そこでこれに関する専門研究機関が求められ、1923年2月に創設されたのが大東文化協会である。同協会のもとに二つの研究組織がつけられ、一つは漢学を中心とする東洋学術研究部門としての東洋研究部であり、研究機関誌『大東文化』を発刊した。二つめは、東西文化の融合による新たな文化の創造を目指した比較研究部であり、研究論文を研究誌『EX ORIENTE』（エクス・オリエンテ）に英、独、仏の3か国語に翻訳して発刊した。これが「東洋研究所の先駆」となった。また、同年9月、教育研究機関として大東文化学院を設立し、これが現在の大東文化大学へと引き継がれた。

戦後、この二つの研究組織は1953年（昭和28年）大東文化大学附属大東文化研究所に継承され、1961年大東文化学園振興計画の下で、研究所は「東洋研究所」として、法人附属機関から大学附置研究所となり、その目的を「アジアを中心とする人文、社会、自然の科学的調査研究を行い、広く学術の発達に寄与すること」としたのである。この時、研究所の組織として研究局第一部（人文科学系）、研究局第二部（社会科学系）が置かれた。「前者は東洋研究部、後者は比較研究部の性格を継承した」とされており、研究課題は東洋学術の研究、世界の地域研究、国際諸関係の研究であった。なお、この間についての詳細は、『東洋研究所20周年記念論集』において大久保達正、永田元也が紹介している。

その後、研究所は1977年に学長、研究所所長を中心

とする運営委員会（現管理委員会）において研究体制の改革が行われ、研究部会、専任研究員などを置く提案がなされるとともに研究所規則改正が行われた。当時の研究班は、第1班、日本儒学史研究班（日本近代思想史上における儒学の位置）、第2班、漢詩文研究班（中国漢詩文の日本漢詩文学への影響）、第3班、中国研究班（中国政治経済情勢と国際関係）、第4班、アジア研究班（アジアに関する政治経済社会研究）、第5班、日本経済史研究班（災害飢饉の経済史的研究）、第6班、海軍資料研究班（昭和9年より21年にかけての海軍の基礎資料の分析、および『昭和社會經濟資料集成』第一巻発行）、第7班、松方正義研究班（明治時代の財政について第一人者、後の大蔵大臣、首相の松方正義の研究。『松方正義関係文書』を刊行）、以上7班の研究体制で活動が行われていた。これらが翌78年に三班に統合され、そこに専任研究員教授、講師、助手を置くことにしたのである。それが第1班、政治経済班（旧中国研究班）、第2班、人文科学班（旧日本経済史研究班、旧日本儒学史研究班、旧漢詩文研究班）、第3班、国際関係班（旧アジア研究班）であり、それぞれに研究助手として岡崎邦彦、吉宗宏、山田準（現所長）が配置され、川口久雄教授、張庸吾講師を加えた5名が専任研究員として、研究班活動に専念することになった。また、この年から研究所所長が土井章から中島敏に引き継がれるとともに、これまで研究所機関誌『東洋研究』は不定期刊行物であったが、年4冊発刊されることになったのである。

私が助手として配属された政治経済班は、土井章を班長とし、他に霞山会の蔵居良蔵、江頭数馬（毎日新聞）、明野義夫（旧経済企画庁）、富山栄吉ら元東亜同文書院出身の方々、さらにわが大学から永田元也（経済学部）、吉村五郎（外国語学部）が加わり、『東洋研究』への執筆と出版を手掛けておられた。私は、『現代中国革命重要資料集』に収録する資料などの翻訳が日常の仕事であったが、時々研究班研究会が有楽町の「昭和同人会」事務所で開かれ、これへ参加した。研究会は研究員の他に新聞記者、議員秘書らが加わり、私は衝立の裏で議論に耳を傾け、メモを取っていた。

当時、研究所は板橋校舎旧管理棟内にあったが、改築

のために旧50周年記念館の図書館事務会議室へ移動した。研究室はなく事務室兼研究室であったが、図書館内の蔵書を自由に閲覧することができるという利点があった。何度か引っ越しを繰り返し、1999年現在の徳丸研究棟に落ち着くまで、引っ越しのたびに研究所蔵書の整理や保存に腐心した。

研究所助手として翻訳作業に追われている頃、事務室の休憩時間や終業時に土井は研究所の研究活動、研究方法、さらに研究所の将来構想を話されることがあった。土井は満鉄調査部、東亜研究所などを経て、戦後はエカフェ協会を設立し、昭和同人会事務長として中国経済研究を続けてこれ、1961年の大学附置東洋研究所発足時から主任研究員として研究活動の発展に力を入れた。研究所の研究活動には三つの段階があり、「第一段階は、史料の発掘と保存、第二に、調査研究、最後に政策立案という段階であり、またそれぞれが独立した分野を形成する。私たちの政治経済班は、第三の段階を目指すよう心得よ」と言われた。さらに、『東洋研究』には毎号論文が出せるよう準備せよ、『東洋研究』は売り物だから売れる論文を書け」と厳しく指導された。また、当時三つの研究班を中心に研究所大学院を作りたいとの将来構想を持っておられた。

土井から中島敏、岡倉古志郎、古島和雄と所長が交代していくなかで、研究所における将来構想は、私学における研究所の在り方として議論されるようになった。学長からの諮問事項に対する答申として示されたのが、1982年末の研究所「基本計画策定に関する答申書」であり、これを作成した栗原圭介（基本計画策定委員長）は、その前文で、「研究員は独創的創造性に富む研究に励み、実りある論文を作成する。研究成果を『東洋研究』に掲載し、ないしは著書として発表するなど実績を積むことに心掛け、当研究所存立の意義を明確にし、質的向上を図り、学界に貢献するよう努力すべきものとする。……研究体制の基本姿勢として、東西文化の融合、接触、受容、反発、類似性、相違性などを明らかにする必要上、比較研究の方法論を取り入れ、研究の効率化を図る必要がある。とくに東洋学の中核的位置にある日本、中国、インドの思想を基本とし、文化の融合、延いてはこれら文化の根源を研究を通して闡明することに基点を置く必要がある」と述べられ、さらにわれわれ研究員へ「本学の学術研究の指導的役割を担うべく努力せよ」と励まされた。この基本計画のほかに、付属資料として人文科学部会、社会科学部会の拡充と資料センター設立（文献センター構想）が提案された。また翌年から『EX ORIENTE』（エクス・オリエンテ）の復刊が決定した。

翌1983年、学長から追加諮問があり、研究所共同研究の在り方について検討され、そこで「全学研究者の協力を得て東洋研究所にふさわしい共同研究の充実を図るための基本方針と諸方策」が作成された。これを担当した古島和雄は1984年『東洋研究所所報』第1号の中で、共同研究の「もっとも単純な、それでいて基礎的な問題」として、二つの視点から学内における共同研究の難しさ、また研究所の意義を述べている。一つは、専門諸領域が細分化された学界の状況から見て、共同研究は個人研究よりも多くの成果を挙げやすいとし、当時の境界領域、学際領域の研究に対する研究者の関心を取り上げ、実態調査、各国の比較研究など応用研究は共同研究が有効だと述べている。ただし、大学内における共同研究の難しさにも触れ、共同研究を組めるのは全国的に散らばっている少数の共同研究者であり、教育を中心に組織された大学内部の同僚ではない。従って、学内を中心として共同研究を進めようとする構想は厳しい情況で、共通の課題を掲げてチームを組んでみるが、結果は個人研究の寄せ集めということに終わる、と指摘している。

第二に、共同研究は研究者同士の長い付き合いによって、自然に問題への関心や方法など相互に影響し合い、

共通の研究の場を知らず識らずのうちに拡大するものである。すなわち、研究者の日常的な付き合いと、研究を巡る交流が深まれば、研究の上での相互影響を通じて共通の関心を生み、共同研究を有効なものにする場が作られるのであり、従って、東洋研究所の研究もまたこうした基礎的な研究の場を強めることに力を注ぐ必要があると述べている。

古島は1982年東京大学社会科学研究所を定年退官し、その後研究所の政治経済班に加わり、1984年文学部からの移籍要請に応えられる忙しい中で、現在に至る研究所体制の確立に多大な貢献をされたのである。とくに、われわれ研究員の身分確立に努め、学部への講義出向の道を拓いた。さらに研究員に個別の研究室が与えられ、研究環境は格段に改善された。古島が「さあ、これからは安心して研究に打ち込んでください」とおっしゃった時、喜びとともに緊張感も覚えたものである。

私学の研究所がどうあるべきか、所員間でよく議論されていたが、古島は「研究所を大学の輝くアクセサリーにし、サロンの雰囲気をつくりだそう」と話された。すなわち、上述した共同研究に関する二つの視点が示すように、東洋研究所における共同研究は、大学の外と内を結びつける役割としての機能を果たし（アクセサリー）、また研究員同士が互いに影響し合っ、自らの研究内容を深める場（サロン）となるようにとの意味である。ただ、古島にとってこのサロンは、東京大学の退職金を二年で使い果たすほど、お金のかかるものであった。

1984年前後に、研究所には佐藤武敏、大野盛雄、鉄井慶紀、松本照敬らが加わった。その後、多くの専任研究員が1986年の国際関係学部設置のために移籍してしまっただが、古島所長の後を継いだ遠藤光正は、古島が敷いた路線を引き継ぎ、同じく外へ向かって他流試合をせよと厳しく叱咤された。その後研究所所長は、松本照敬、福田俊昭、山田準へと引き継がれ、少ない予算で研究所を維持し、共同研究の活動を支えてこれた。入所当時の大学院構想はその後聞かれなくなったが、研究班のオブザーバーとして参加する大学院生、他大学から参加を希望する研究者が増えて行った。また、今年研究所の公開講座は30年目になるが、そこへ参加されている方、地域連携センターの公開講座に来られている方も一部研究班の公開研究会へ参加している。

なお、研究所はこれまでに多くの出版物を発刊してきたが、先に挙げた1978年に計画され1997年に完結した『松方正義関係文書』（全18巻・別巻1）、2008年に完結した『昭和社會經濟史料集成』（全35巻・別巻2）の刊行における兵頭徹の刻苦奮闘を忘れてはならない。ここにその功績を讃えたい。この他に現在、『藝文類聚』、『茶譜』、『岡倉天心—伝統と革新』、『天文要録の研究』等々多くの刊行物を発刊している。再来年には、研究所機関誌『東洋研究』200号が発刊される予定である。このように研究所は内と外とを結ぶ大きな役割を果たしているものであり、単に「アクセサリー」であっても、伝統と優れた実績によって輝きを放つ宝石でありたいと所員一同心がけている。

最後に、35年間、研究所の先輩、同僚研究員から受けた影響は大きく、その情報や知識は膨大なものであるが、最近、私が思い出すことは、われわれより前の世代は戦争体験者が多かったことである。土井は満鉄時代を経て、インドネシア海軍武官府、日中和平工作と終戦時の政府に係わり、村田克巳はインパール作戦前線でのイギリス軍に対する調略とインド国民軍に関係し、古島は学徒動員からフィリピン派遣、アツ島玉砕の直前にかろうじて生き残り、鉄井は校庭の大木によって原爆の難を逃れたこと等々、彼らの体験を聞くことが多かった。これらが私の研究に大きく影響しており、彼らの戦争体験と反省は、世代を超えて受け継いでいかなければならないと考えている。（敬称略）

〔国際交流講演会〕 東京裁判：歴史の犯罪化

駐日アイルランド大使館二等書記官 エリオット・ミルトン
2014.2.15 (土) 15:00 ~ 於：大東文化会館 K-0302 研修室

裁判の目的：

アメリカをはじめとした戦勝国の東京裁判の目的は、世界大戦へ先導した日本の指導者たちを裁くことだけではなく、戦後の日本、ならびにアジア諸国への影響力を見据えた戦略的な意図があった。日本国民に、審理した内容を戦前史実として伝えると同時に、戦争責任の所在を認知させ、占領下に築かれた民主的復興を、好意的に受け入れられる為の体制を整えたかった。また、西洋からの独立の希望を持っていたアジア諸国においても、西洋の民主主義の価値観を展開し、優位性を明示することで、影響力を維持したかった。

ニュルンベルク裁判の影響：

東京裁判は、ニュルンベルク裁判をモデル判例として審理が進められたが、事実をニュルンベルクという雛形に当てはめようとし、日本が戦争へと向かった経緯が、ナチスの陰謀の極東バージョンとして、あまりに単純化されてしまったということである。陰謀罪として告訴した理由は、陰謀証明に必要な証拠規則が、他の刑事告訴よりも簡単であった点にあり、1928年以降の領土獲得計画に被告人が関わっていたことを立証することが困難であったことを考えると、このやり方は検察局にとって非常に都合が良かったのである。

裁判に対する当時の反応：

東京裁判は、西洋においてほとんど報道されていなかった。欧米国民の中で戦争に対して疲弊していたことが、一因と考えられる。ニューヨークタイムズが、欧米のメディアの中で、最も裁判に関心を示したメディアだったが、裁判当初の論調は、検察側の主張を大筋で支持する一方、昭和天皇の戦争責任については、起訴すべきとの独自の論調を展開した。また、同社は、東京裁判に対する自国の無関心な風潮が、侵略戦争に対する危機意識の低下につながると懸念していた。また、真珠湾攻撃は裁判の大きな事案の1つだったが、アメリカの共和党寄りの新聞社は攻撃前のルーズベルト政権の行動を分析し報道した。

東京裁判の欠陥：

東京裁判の欠陥は下記の4点が挙げられる。
①アメリカや西洋にも部分的に戦争責任がある



とする考え方は一切排除された。②国際検察局は、命令書や手紙等による陰謀罪の立証は不可能であると判断し、口頭での証言に頼ることになってしまった。③被告人選択には政治的判断があり、陸軍こそが真の元凶であるという見解が反映されていると言える。事実として、28名のうち19名が軍人であり、絞首刑に処された8名のうち7名が陸軍出身者であった。④全ての共謀を明らかにすることに失敗し、最終的には、28名の被告のうち18年間に及ぶ日本の統治機構を維持した者は一人も存在していなかったにも関わらず、検察側の陰謀説が押し進められた。

日本国民を犠牲者として：

「東京裁判は、単なる勝者による裁きである」という認識が、日本世論の中で浸透しないように、検察局の中には、日本を検察に加えるべきとの意見もあった。検察には、昭和天皇と日本国民が陸軍に騙され、国民の潔白を証明するという目的があったと推測される。しかし、この提案は西欧諸国の国民に受け入れられるものではなかったため、却下された。

昭和天皇の問題：

驚いたことに、オーストラリアを除き、連合国は天皇を起訴対象としないことで審理を進めていた。同時に、検察局は、自国の世論への影響に配慮し、裁判における天皇の取り扱いを、公に宣言しなかった。アメリカは、日本が無条件降伏する前から、天皇は日本人にとって崇拜の対象であるとの分析をしていた。冷戦が激化してくると、ソ連に対抗し、日本を民主主義的に復興させ、アメリカ陣営に取り込むために、天皇制の維持がますます不可欠な要素と判断された。

2014年度 東洋研究所共同研究課題

1班	東洋における異文化の本質的相違性に関する研究
	<p>期間 2013～2015年度（研究期間中）</p> <p>メンバー（11名） 團山田準〔主任〕 團岡崎邦彦・小林春樹・田中良明 團田中寛・中村昭雄・田辺清・井上貴子 団片岡弘次・松本照敬・福田俊昭</p> <p>概要 今日の複雑な社会情勢を眺める人は、多様な価値観の存在を相互に認め合うことの必要性を痛感するであろう。地球という有限な環境の中で、多くの生命が共存する社会の在り方が模索されねばならない。本共同研究は、こうした「共生社会」の創造を視野において、東洋における異文化及び東西文化に見られる相違性を抽出することを目指している。異文化の根底にある相違性が認識されれば、相互理解への途も開けてくるであろう。21世紀における新しい社会の創造を探索して先駆的な研究を進めていきたい。</p>
2班	20世紀・21世紀における日中関係と中国の対外抵抗・対内改革・世界大同
	<p>期間 2012～2014年度（研究期間中）</p> <p>メンバー（19名） 團岡崎邦彦〔主任〕 団村井信幸・葛日知秀・高安雄一・篠永宣孝・内田知行・柴田善雅・鹿錫俊・齊藤哲郎 団伊藤一彦・上野英詞・植松希久磨・嶋亜弥子・由川稔・鎧屋一 団安藤正士・小島麗逸・近藤邦康・中島宏</p> <p>概要 アヘン戦争以後半植民地に陥った中国は、1895年日清戦争に敗れて帝国主義列強に分割される危機に直面した。敵復は課題を「救亡（国家を滅亡から救う）—民主（民を君主の奴隷から国家の主人に変える）」と把握した。外国の侵略に抵抗し、国内の君主専制を改良し、革命し、国家間・階級間の圧迫・闘争がない「世界大同」をめざす、という運動が次々に起こった。その一つである中国共産党の運動をもこの新潮流の中の一つとしてとらえて、過去と現在を分析し、未来を予見する。10年の長期研究計画（2012～2021年）として「中国共産党100年史」研究を資料の整理を中心に進めたい。大東文化大学中国近現代史研究の拠り所として、学内はもちろん、学外に対しても公開して研究、協力していきたい。</p>
3班	諸外国における東西文化研究
	<p>期間 2014～2016年度（新規）</p> <p>メンバー（6名） 團山田準〔主任〕 団クリスチャン W.シュパング 団エリオット・ミルトン、フレデリック・ジラルド、マリア・キアラ・ミリオーレ、クリスティーナ・ラフィン</p> <p>概要 国際交流を目的とし、諸外国における日本研究や東洋研究がどのように行われているかを各研究員の究テーマを中心に発表し、諸外国の東西文化研究の動向と研究交流の可能性を探る。</p>
4班	日中文学の比較文学的研究 — 『藝文類聚』 を中心にして —
	<p>期間 2014～2016年度（継続）</p> <p>メンバー（10名） 団中林史朗〔主任〕 團田中良明 団日吉盛幸・浜口俊裕・小塚由博・藏中しのぶ 団福田俊昭・成田守・芦川敏彦・関清孝</p> <p>概要 本邦に伝来する最古の現存類書の『藝文類聚』は、我が国の古典文学に多大の影響を与えていることは周知の事実である。それが今日に至るまで雑家の書として等閑視されてきた嫌いがある。それ故、未読解の本書を訓読して、原典との校勘、典拠の解明、索引の作成をすることは、単に国文学への影響のみならず、類書学上においても大いに貢献するものであると考える。その研究成果を逐年刊行して今日に及んでおり、斯学の評価を得ている。</p>
5班	西欧植民地主義再考
	<p>期間 2014～2016年度（継続）</p> <p>メンバー（5名） 團山田準〔主任〕 団滝口明子 団岡倉登志・齋藤俊輔 団生田滋</p> <p>概要 西欧植民地主義の成立、発展、思想的背景については数多くの研究がなされて来た。これら西欧植民地主義の歴史研究はヨーロッパと新大陸つまり大西洋世界、ヨーロッパと旧大陸つまりインド洋と太平洋世界を対象とし、それとは別に植民地宗主国の歴史研究が存在した。これら大西洋世界における西欧植民地主義の歴史研究からはインド洋と太平洋世界における植民地主義が見えてこない。逆にインド洋と太平洋世界における西欧植民地主義の歴史研究からは、大西洋世界の植民地主義は見えてこない。そこでこの研究班では、大西洋世界、植民地宗主国、インド洋と太平洋世界の3大研究対象を比較統合し、西欧植民地主義を再考することを目的に、いくつかの個別的研究を分担して研究しようとする物である。</p>
6班	唐・李鳳撰『天文要録』の研究（訳注作業を中心として）
	<p>期間 2013～2015年度（研究期間中）</p> <p>メンバー（12名） 團小林春樹〔主任〕 團田中良明 団渡邊義浩・小坂眞二・小林龍彦・近藤正則・中村聡・中村士・細井浩志・山下克明 団進藤英幸・濱久雄</p> <p>概要 『『天文要録』の考察〔一〕』（2011年3月）として、その第1冊（巻一）の、訳注と現代語訳を中心とした研究成果を上梓した前田尊経閣文庫蔵『天文要録』（唐・李鳳撰）に関する研究を継続する。具体的には、同書第2冊、第3冊（巻四、巻五）について同様の作業を続行するとともに、完全原稿を完成し、その成果を逐次刊行する。なお、オブザーバーとして大東文化大学大学院博士課程の大兼健寛氏にご参加戴く。</p>

7班	茶の湯と座の文芸
	期間 2014～2016年度(研究期間中)
	メンバー(7名) 〇蔵中しのぶ〔主任〕 〇相田満・安保博史・矢ヶ崎善太郎・佐藤信一・三田明弘・高木ゆみ子 概要 平成16年度～18年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(C)(2)「茶の湯と座の文芸の本質の研究—『茶譜』を軸とする知的体系の継承と人的ネットワーク」の成果および、2008～2011年度の東洋研究所研究班「茶の湯と座の文芸」の成果として刊行した『茶譜 卷一注釈』～『茶譜 卷五注釈』を発展的に継承すべく、江戸時代中期寛文年間の成立とされる茶道百科事典『茶譜』全十八巻の注釈研究を継続しておこなう。研究分担者は、科研費研究から継続して参加する蔵中しのぶ(日本文学・上代中古文学)、相田満(人文情報学・中古中世文学)に加えて、安保博史(日本文学・近世文学)・矢ヶ崎善太郎(建築史・茶室建築)、さらに今年度より、佐藤信一(日本文学・中古文学)、三田明弘(日本文学・中世文学)、パリから高木悠美子(日本歴史学・茶道史)を兼任研究員に、研究参加者には笹生美貴子(日本文学・中古文学)を加え、茶道文献を対象とした学際研究をめざす。
8班	『晋書』の研究
	期間 2013～2015年度(研究期間中)
	メンバー(10名) 〇小林春樹〔主任〕 〇高橋康浩 〇渡邊義昭・池田雅典・石井仁・小林聡・仙石知子・堀池信夫・町田隆吉・気賀澤保規 概要 現在、二十四史に含まれる『晋書』は唐代の編纂にかかるもので、史料的に偏向が多いと言われている。唐修『晋書』の原史料となった十八家『晋書』は、断片的ではあるが、類書に散見する。従来から言われてきたような偏向が、果たして『晋書』に存在するの否か、という問題を『晋書料注』および『十八家晋書』を利用した校補本『晋書』の作成により解明していくことが、本研究の目的である。今期の研究では、2012年度に出版した『晋書』本紀1を受けて『晋書』本紀2を出版する。
9班	イラン文化圏における伝統と変容の研究—フィールド調査資料の再考—
	期間 2012～2014年度(研究期間中)
	メンバー(8名) 〇原隆一〔主任〕 〇山田準 〇須田俊彦・飯国有佳子 〇鈴木珠里・南里浩子・林裕・斉藤正道 概要 「イラン文化圏」とは、現在のイラン国(イラン・イスラーム共和国)に限定するものではない。それはインド文化圏、中央アジア・トルコ文化圏、アラブ文化圏など隣接する文化圏との歴史的交流のなかで育まれた広域の文化圏をさしている。同様に、「文化、文化圏」とは人間の生活舞台である自然生態環境、生業を基盤とした経済活動、その上に展開する社会や文化を含む総体を含んでいる。 本研究では、これまでの日本人を中心とする現地フィールド調査で収集したイラン文化圏における基層文化とその変遷に関する一次資料の整理と読みかえし作業をととして、自らの新しい研究手法を確立することにある。また、東南アジア文化圏をフィールド調査にする飯国有佳子氏(文化人類学)を新たに研究分担者に加え、広域文化圏間の交流と比較へと視野を広げていく。
10班	岡倉天心(覚三)にとつての「伝統と近代」
	期間 2012～2014年度(研究期間中)
	メンバー(7名) 〇田辺清〔主任〕 〇宮瀧交二・篠永宣孝 〇池田久代・岡倉登志・岡本佳子・依田徹 概要 岡倉天心(1862-1913)は、幼時より漢籍とヘボン塾で英語を学び、東京開成学校に入学、1877年東京大学で政治学、理財学ならびにフェノロサについて哲学を学び、卒業後、フェノロサの日本美術研究に協力し、古美術の研究と新しい日本画の樹立を目ざした。86年文部省の美術取調委員としてフェノロサとアメリカ経由でヨーロッパを巡り翌年帰国、東京美術学校の創設、90年校長に就任した。 この間美術専門誌『国華』を創刊、日本絵画協会主宰、帝室技芸員選振委員、古社寺保存会委員に任ぜられ、98年校長を辞職、橋本雅邦、横山大観、菱田春草、下村観山らと日本美術院を創設、新しい日本画を目ざして美術運動をおこした。1904年(明治37)大観、春草を伴い渡米し、ボストン美術館の仕事にあたり、05年同館の東洋部長となり、06年ニューヨークで『茶の本』を出版、その年の末に日本美術院を茨城県五浦へ移し、大観、春草、観山らと住み、07年文部省美術審査委員会委員となり、08年国画玉成会を結成、10年東京帝国大学で「泰東巧芸史」を講義した。翌年欧米旅行を行い、ハーバード大学からマスター・オブ・アーツの学位を受けた。続いて12年インド、ヨーロッパを経て渡米し、13年(大正2)病を得て帰国、療養に努めたが、同年9月2日新潟県赤倉山荘で没した。英文著書『東洋の理想』(1903)、『日本の覚醒(かくせい)』(1904)、『茶の本』(1906)などは外国人はもちろん、翻訳されて広く日本人にも影響を与えた。 岡倉天心研究はまだ研究されなければならない点があるが、本研究部会においては、岡倉天心の「伝統と近代」に着目し幅広い研究を進めて行きたい。
11班	南アジアにおける社会変動と文化変容—周縁からのアプローチ
	期間 2014～2016年度(新規)
	メンバー(7名) 〇篠田隆〔主任〕 〇須田俊彦・石田英明・井上貴子 〇片岡弘次 概要 南アジアは近年、経済自由化やグローバル化の流れのなかで、途上国のなかでの成長センターの一角を占めるようになったが、同時に、域内での社会経済発展の地域格差、宗派間格差、社会集団間格差、都市農村格差、所得格差が急速に拡大した。さらに、グローバル化や近代化の進行とともに、南アジア社会の家族、カースト、地域社会の態様と機能、そして人々の行動規範や価値観が大きく変化した。 この急激な社会変動は南アジアで暮らす人々の生活と文化にどのような影響を与えてきたのだろうか。本研究では、多様な民族、宗教、カースト、階級構成をもつ南アジア社会で周縁に位置付けられてきた集団(マイノリティ、少数宗派、弱者階級、下層民、サバルタン、ダリト、アーディワージー、後進階級など)を対象として、彼らと社会変動との関わりを分析する。また、彼らはどういった文学、政治、社会運動をととして、自らの行動規範や価値観を再構成し新たなアイデンティティを模索してきたのかを、社会学や経済学を専門とする委員と歴史学、文学を専門とする委員の共同作業をととして、総合的に研究する。

2013年度 東洋研究所共同研究班活動報告 (2013.4.1 ~ 2014.3.31)

1班	東洋における異文化の本質的相違性に関する研究			
	備考 (刊行物等)	各自の研究テーマに従って、『東洋研究』掲載論文作成のため研究会は開催せず。		
2班	20世紀・21世紀における日中関係と中国の対外抵抗・対内改革・世界大同			
	No.	研究テーマ (発表・演題等)	開催場所	参加人数
	1	1936年国共交渉と西安事変—「反蔣抗日」から「連蔣抗日」への転換—	大東文化会館 404	12名
	2	西安事変の平和的解決の政治過程—西安事変勃発から蒋介石の釈放まで—	大東文化会館 401	12名
	3	中国における朝鮮戦争評価の動向	東洋研究所共同研究室	10名
		現代中国における「歴史」の再生—音楽舞踏史『東方紅』の場合	東洋研究所共同研究室	10名
	4	東アジアの海洋を巡る最近の動向—中国のADIZ (防空識別圏) 設定を巡って	大東文化会館 404	21名
		転換期の中国経済	大東文化会館 404	21名
	備考 (刊行物等)			
4班	日中文学の比較文学的研究—『藝文類聚』を中心にして—			
	No.	研究テーマ (発表・演題等)	人数	開催場所：5のみ大学中国学研究スペース その他は東洋研究所共同研究室
	1	『藝文類聚』巻87 訓読 (4月27日)	7名	7 『藝文類聚』巻87 訓読 (11月2日)
	2	『藝文類聚』巻87 訓読 (5月18日)	7名	8 『藝文類聚』巻87 訓読 (11月30日)
	3	『藝文類聚』巻87 訓読 (6月22日)	9名	9 『藝文類聚』巻88 訓読 (12月21日)
	4	『藝文類聚』巻87 訓読 (7月13日)	8名	10 『藝文類聚』巻88 訓読 (1月25日)
	5	『藝文類聚』巻87 訓読 (8月31日)	8名	11 『藝文類聚』巻88 訓読 (2月22日)
	6	『藝文類聚』巻87 訓読 (9月28日)	8名	12 『藝文類聚』巻88 訓読 (3月8日)
	備考 (刊行物等)	『藝文類聚 (巻八十七) 訓讀付索引』(2014年3月31日発行)		
5班	西欧植民地主義再考			
	No.	研究テーマ (発表・演題等)	開催場所	参加人数
	1	公開講座講師担当に関する打ち合わせ。	山田研究室	3名
	2	研究助成金および購入文献に関する検討。	山田研究室	2名
	3	滝口研究員による公開講座。	大東会館 K-0302	29名
	4	出版計画についての打ち合わせ。	山田研究室	2名
	5	論文執筆と研究状況の報告。	山田研究室	2名
	公開講座	第3回 11月21日(木) ヨーロッパにおける茶文化の誕生と女たち 講師 滝口明子 受講 29名		
6班	唐・李鳳撰『天文要録』の研究 (訳注作業を中心として)			
	No.	研究テーマ (発表・演題等)	開催場所	参加人数
	1	『天文要録』第二冊 (巻四) 二三帳左三行～二三帳左十一行 (10月12日)	東洋研究所共同研究室	6名
	2	『天文要録』第二冊 (巻四) 二四帳右一行～二四帳右一一行 (11月9日)	東洋研究所共同研究室	4名
	3	『天文要録』第二冊 (巻四) 二四帳左一行～二四帳左一〇行 (12月14日)	東洋研究所共同研究室	5名
	4	『天文要録』第二冊 (巻四) 二四帳左一一行～二五帳右三行 (1月11日)	東洋研究所共同研究室	6名
	5	『天文要録』第二冊 (巻四) 二五帳右四行～二五帳左三行 (2月8日)	東洋研究所共同研究室	6名
	6	『天文要録』第二冊 (巻四) 二五帳左四行～二五帳右四行 (3月8日)	東洋研究所共同研究室	6名
	備考 (刊行物等)			
7班	茶の湯と座の文芸			
	No.	研究テーマ (発表・演題等)	開催場所	参加人数
	1	炭置継事 附諸具置所 附炭置作法 附鳥筥 鎖掛置事	大東文化大学 10508 教室 藏中研究室	22名
	2	釜鎖掛弛之事・釜居之事・釜取扱上事 付鎖置様		
	3	下火直様 灰蒔事 附炭置様・薫物 伽羅之事 附香合		
	4	片口之事 附風炉水継・釜中水指継事 附片口置所		
	5	後之炭之事・半田底取長火箸事・炭所望之事		
	備考 (刊行物等)	『茶譜』巻六注釈 (2014年3月21日刊行)		
8班	『晋書』の研究			
	No.	研究テーマ (発表・演題等)	開催場所	参加人数
	1	『晋書校補』帝紀 (二) 刊行に向けた研究計画について (5月20日)	早稲田大学	2名
	2	『晋書校補』帝紀 (二) 原稿進捗報告 (12月19日)	戸山キャンパス 39号館	3名
	備考 (刊行物等)			

『イラン文化圏における伝統と変容の研究』－フィールド調査資料の再考－				
No.	研究テーマ (発表・演題等)	開催場所	参加人数	
9 班	1	大東文化会館	7名	
	「南アジア農村から中東への出稼ぎ労働者たち」			
	「イラン国民の精神と生活をどのように管理・改革するか－イスラーム共和国体制下でのソフトな戦争論を中心に－」(5月25日)			
2	「アフガニスタンの政治近況とフィールドワーク最前線」		15名	
	「フェールズ地方の遊牧民定着村、ヘイラーバードの40年－変貌する家族の姿－」			
	「ヤズド地方のズィールー織物職人のペルシア湾岸への出稼ぎ－1960年代、メイボドの事例から－」			
3	大東文化会館	12名		
「ギーラーン地方の聖所－消えていく聖所と生まれてくる聖所」(7月27日)				
4	「ニザーミー詩編『神秘の宝庫』に描かれた《二人の学者》」		大東文化会館	70名
	「魅惑する都市－詩人ナーデル・ナーデルプールのテヘラン」			
	「父と過ごした日々『ジャマールザード回想録』を読む」			
	「環境主義科学」とイラン国家：イランにおける自然概念の再生			
	「紛争影響下の日常－アフガニスタン・カーブル州北方郡部のローカルガバナンス－」			
「立憲運動時代の演劇について」(3月29・30日)				
備考 (刊行物等)		第4回研究会は、日本イラン研究会と東洋研究所共催のもと2日間開催された。		
岡倉天心(寛三)にとっての「伝統と近代」				
No.	研究テーマ (発表・演題等)	開催場所	参加人数	
10 班	1	東北芸術工科大学	5名	
	2	インド大使館	3名	
備考 (刊行物等)		『岡倉天心 思想と行動』 岡倉登志・岡本佳子・宮瀧交二著 吉川弘文館刊 『曾祖父寛三 岡倉天心の実像』 岡倉登志著 宮帯出版社刊 『岡倉天心 伝統と革新』 大東文化大学東洋研究所岡倉天心班(代表 田辺清)編著 大東文化大学東洋研究所刊		

「アジアの民族と文化」 東洋研究所公開講座のお知らせ

日程・テーマ・講師	講義概要
11月6日(木) 13:00～15:00 東アジアにおける暦(カレンダー)の文化と制度 大東文化大学東洋研究所講師 田中 良明	我々が日常的に用いる暦(カレンダー)。そこに記された日付は誰が決めたものでしょうか。また、日付以外に記された情報は、どうした由来をもつものでしょうか。東アジアでは古来から、暦が国家・政府によって重要視されてきました。暦の善し悪しが、その時代の王朝・為政者の威信に関わり、暦に記された内容が、民衆の生活を左右したのです。本講では、古代から近現代にかけて、中国や日本の暦がどのように発展し、受容されてきたのかをご紹介します。
11月13日(木) 13:00～15:00 16、17世紀ポルトガル領ゴアの統治と在地社会 ーヨーロッパ植民地主義の端緒ー 東洋研究所兼任研究員 大泉日伯センター日伯学園/日本語教師 齋藤 俊輔	ポルトガルのアジア進出は一般的に海上交易の支配を目的としたものであるとされ、その支配は「海洋帝国」や「海の帝国」と呼ばれています。それゆえ、アジアでは商館や要塞が築かれただけで、いわゆる領土の支配は十分に進展しなかったと考えられています。これに対して、本講ではポルトガル領ゴアにおける在地村落の統治がどのように進められたのかを確認して、領土の支配がポルトガルのアジア進出にとって重要な政策のひとつだったことを明らかにしたいと思います。
11月20日(木) 13:00～15:00 アフガニスタン ー政治社会と農村に暮らす人々の今ー 東洋研究所兼任研究員 カーブル大学客員研究員 林 裕	2014年、アフガニスタンは同国史上初となる選挙による国家元首の交代が行われる。4月に第一回の選挙、そして6月の決選投票を経て、2001年以降アフガニスタンを率いてきたカルザイ大統領の後任が決定される。アフガニスタンの国内政治の動きがある一方で、タリバン政権が崩壊した2001年以降、13年に国際社会による支援が実施されてきた。そこで本講では、アフガニスタンの政治的動きを概観したうえで、農村社会に暮らす人々の今に焦点を当て、現代アフガニスタンの一端を紹介することを目的とする。アフガニスタンは、人や社会、そして非常に親日国であることなどが報道されることよりは、対テロ戦争やアル・カイダとのつながりが多く報じられている。本講が、アフガニスタンへのさらなる興味や関心への契機となれば幸いです。

■会場：大東文化会館 3階 K-0302 研修室

■交通：東武東上線『東武練馬駅』下車徒歩3分

■事前の申込が必要です。お問い合わせは東洋研究所事務室までお願いいたします。

東洋研究所出版目録 (2014年4月現在)

No.	書名	著者	出版年	巻号
1	会津藩の人口政策	松枝 茂著	1966.3	
2	校註 唐詩精華	猪口 篤志著	1966.5	
3	上代国語法研究	佐伯 梅友著	1966.12	
4	現代中国政治経済論	土井 章著	1967.9	
5	子思研究	下斗米 晟著	1968.7	
6	喪服總説	影山 誠一著	1969.3	
7	ケインズ派経済学	古屋 美貞著	1969.4	
8	仁の研究	下斗米 晟著	1966.10	
9	近世社会経済史料集成	高橋 梵仙編		
	(一) 飢饉考 (上)		1969.1	
	(二) 飢饉考 (下)		1969.1	
	(三) 百姓一揆 其他		1980.3	
	(四) 飢渴もの (上)		1977.2	
	(五) 飢渴もの (下)		1977.2	
10	ワーズワス論考	武井 亮吉著	1969.7	
11	日本地方史誌目録・索引	高橋 梵仙編	1969.1	
12	夏目漱石の詩	中村 宏著	1970.12	
13	わが日本文化育成への諸相の研究	横山 七郎著	1970.1	
14	孟子伝	猪口 篤志著	1970.2	
15	漢語否定詞の研究	野口 正之著	1970.3	
16	中国経學史綱	影山 誠一著	1970.10	
17	イギリス・アメリカおよび日本の手形交換制度の特質の比較研究	佐藤 良輔著	1970.11	
18	現代日本語要説	佐伯 梅友監修	1972.4	
19	中国社会主義経済の特質	土井 章著	1973.9	
20	唐代小説選註	内山 知也編	1973.3	
21	訳注 清代学術概論	山田 勝美著	1973.1	
22	日本國現報善惡靈異記註釋	松浦 貞俊著	1973.6	
23	ギュンター・アイヒ放送劇集	宇井 英俊訳	1974.4	
24	中国の食糧問題	土井 章著	1975.2	
25	現代中国の革命と建設	江頭 数馬著	1975.9	
26	日本人口統計史論集	高橋 梵仙編著		
	上		1975.9	
	下		1976.2	
27	仏教歌謡集成	武石 彰夫編著	1976.1	
27a	続仏教歌謡集成	武石 彰夫編著	1977.3	
28	中国の対外貿易序論	富山 栄吉著	1977.3	
29	明治前期公債政策史研究	藤村 通著	1977.3	
30	中国経済開発論	土井 章著	1977.5	
31	仏教文学の周辺	武石 彰夫著	1977.9	
32	中国古代樂論の研究	栗原 圭介著	1978.3	
33	中国の対外経済交流の展開	明野 義夫著	1978.3	
34	現代中国革命重要資料集	土井 章監修		
	第一巻 八党大路線と四つの現代化		1980.3	
	第二巻 主観的能動性と客観的合理性の交錯		1981.3	
	第三巻 文化大革命とその批判		1984.3	
35	幕末明治 海外体験詩集—海舟・敬宇より鷗外・漱石にいたる—	川口 久雄編	1984.3	
36	E C通貨統合の回顧と展望	河合 俊三著	1981.2	
37	真福寺本 文鳳鈔	川口 久雄解説	1981.3	
38	敦煌資料と日本文学	川口 久雄編		
	(一) 敦煌本 破魔變・四獸因縁		1983.8	
	(二) 敦煌本 敦煌壁画繪解き銘文集		1983.8	
	(三) 敦煌本 大目乾連冥間救母變文		1984.3	

(四) 敦煌本 于闐國和尚 阿弥陀經講經文		1984.3	
39 明治維新期 日田掛屋商人資本の研究	兵頭 徹著	1999.9	
40 〈古今小説〉語彙索引	大東文化大学		
上冊	東洋研究所・	1984.3	
下冊	中国近世語研究班編	1984.3	
41 バンドン会議と五十年代のアジア	岡倉古志郎編著	1986.3	
42 《茅盾短編小説集》語彙索引	大東文化大学	1988.3	
	東洋研究所・		
	五四文学言語研究班編		
43 音頭口説集成	成田 守編		
第1巻		1996.3	
第2巻		1996.9	
第3巻		1997.9	
第4巻		1998.9	
44 年代学 (天文・暦・陰陽道) の研究	大谷 光男他	1996.3	
45 琉球官話課本《百姓官話》《学官話》《官話問答便語》語彙索引	瀬戸口律子他著	1997.3	
46 宣明暦注定付之夏の研究	遠藤 光正他	1997.3	
47 「高麗史」暦志 宣明暦の研究	遠藤 光正他	1998.3	
48 東アジアの古代史を探るー暦と印章をめぐってー	大谷 光男著	1999.2	
49 「高麗史」暦志の研究 付、宣明暦関係用語・事項解説	神田 泰主編著	2000.3	
50 朝野僉載の本文研究 一付・『耳目記』考一	福田 俊昭著	2001.3	
51 東アジアの天文・暦学に関する多角的研究	小林 春樹 (編)	2001.3	
52 敦煌類書の研究	福田 俊昭著	2003.2	
53 若杉家文書『三家簿讀』の研究	大東文化大学東洋研究所編	2004.3	
54 「若杉家文書」中國天文・五行資料の研究	小林 春樹・山下 克明編	2007.3	
55 『翰林學士集』注釈	福田 俊昭他著	2006.3	
56 『延暦僧録』注釈	藏中 しのぶ著	2008.3	
57 『天文要録』の考察 (一)	小林 春樹・山下 克明編	2011.3	
58 晉書校補 帝紀 (一)	渡邊 義浩・高橋 康浩編	2013.3	
59 岡倉天心 伝統と革新	東洋研究所・岡倉天心研究班	2014.3	
	代表田辺 清編		
60 松方正義関係文書	藤村 通監修 (1~5)	1979.11	1~8・
『侯爵松方正義脚實記』(1~5) 書翰篇 (1~4)	大久保達正監修	~2002.9	別・補卷
伝記資料篇 (1~4) 松方家萬歳閣資料 (1~3)	(6以降)		
谷家所蔵資料 大蔵省文庫『松方家文書』(1~2)			
総目次・補遺・索引 (別卷)			
松方伯財政論作集 (補卷)			
61 藝文類聚 訓讀付索引	大東文化大学	1990.3	1~16、
	東洋研究所編	~2014.3	80~87
62 昭和社會經濟史料集成	土井 章監修 (1~25)	1978.11	1~38
第1巻~第29巻: 海軍省資料 (1~29)	兵頭 徹他編 (26以降)	~2011.8	
第30巻: 海軍省資料別巻総目次・総索引			
第31巻~第37巻: 昭和研究会資料 (1~7)			
第38巻: 昭和研究会資料別巻総目次・総索引			
63 茶譜 注釈	藏中 しのぶ 他著		
巻一		2009.3	
巻二		2010.3	
巻三		2011.3	
巻四		2012.3	
巻五		2013.3	
巻六		2014.3	
64 EX ORIENTE	大東文化大学	1983.3	1~6
	東洋研究所編	~1993.3	
65 東洋研究	大東文化大学	1961.7~	1~191
	東洋研究所		

■人事

兼任研究員に委嘱

【新任】石田 英明・田中 寛・篠田 隆・
C.W. シュパング・飯國 有佳子・小塚 由博
(期間：2014年4月1日～2016年3月31日)

兼任研究員に委嘱

【新任】F.R. ジラルール、E. ミルトン、M.C. ミリオール、
C. ラフィン・佐藤 信一・高木 ゆみ子・
三田 明弘・気賀澤 保規
(期間：2014年4月1日～2016年3月31日)

■名簿

東洋研究所管理委員会委員 (7名)

山田 準 (所長・専任研究員)
岡崎 邦彦 (専任研究員)
日吉 盛幸 (兼任研究員)
中林 史朗 (兼任研究員)
篠永 宣孝 (兼任研究員)
田辺 清 (兼任研究員)
原 隆一 (兼任研究員)

所長・専任研究員 (4名)

所長
山田 準 教授(東西交渉史・貿易史)

研究員

岡崎 邦彦 准教授 (中国政治経済)
小林 春樹 准教授 (東洋暦学)
田中 良明 講師 (中国思想史)

事務室 (2名)

事務長 福田 八重子
特別契約 山本 彰

兼任研究員 (26名)

日吉 盛幸 (文・日本文学科 教授)
浜口 俊裕 (文・日本文学科 准教授)
中林 史朗 (文・中国学科 教授)
村井 信幸 (文・中国学科 准教授)
高橋 康浩 (文・中国学科 特任講師)
小塚 由博 (文・中国学科 助教)
宮瀧 交二 (文・英米文学科 教授)
篠永 宣孝 (経・社会経済学科 教授)
高安 雄一 (経・社会経済学科 教授)
葛目 知秀 (経・社会経済学科 講師)
C.W. シュパング (外・英語学科 准教授)
藏中しのぶ (外・日本語学科 教授)
田中 寛 (外・日本語学科 教授)
齊藤 哲郎 (法・政治学科 教授)
中村 昭雄 (法・政治学科 教授)
石田 英明 (国・国際関係学科 教授)
篠田 隆 (国・国際関係学科 教授)
内田 知行 (国・国際関係学科 教授)
柴田 善雅 (国・国際関係学科 教授)
滝口 明子 (国・国際関係学科 准教授)
須田 俊彦 (国・国際関係学科 准教授)
田辺 清 (国・国際文化学科 教授)
井上 貴子 (国・国際文化学科 教授)
原 隆一 (国・国際文化学科 教授)
鹿 錫俊 (国・国際文化学科 教授)
飯國 有佳子 (国・国際文化学科 講師)

兼任研究員 (46名)

相田 満 (国文学研究資料館准教授)
芦川 敏彦 (浜松学芸中・高等学校非常勤教諭)
鎧屋 一 (目白大学外国学部教授)
安保 博史 (群馬県立女子大学教授)
池田 久代 (皇學館大学教授)
池田 雅典 (埼玉県立所沢高等学校常勤講師)
石井 仁 (駒澤大学准教授)
伊藤 一彦 (中国研究所理事)
上野 英詞 (海洋政策研究財団調査役)
植松 希久磨 (大東文化大学非常勤講師)
岡倉 登志 (大東文化大学名誉教授)
岡本 佳子 (国際基督教大学準研究員)
片岡 弘次 (大東文化大学名誉教授)
気賀澤保規 (元明治大学文学部教授)
小坂 眞二 (陰陽道研究者)
小林 聡 (埼玉大学教授)
小林 龍彦 (前橋工科大学教授)
近藤 正則 (岐阜女子大学教授)
斉藤 正道 (東京外国語大学非常勤講師)
齋藤 俊輔 (大泉日伯センター日伯学園
日本語教師)
佐藤 信一 (白百合女子大学教授)
嶋 重弥子 (日本福祉大学非常勤講師)
鈴木 珠里 (大東文化大学非常勤講師)
関 清孝 (埼玉県立伊奈学園総合高等学校教諭)
仙石 知子 (日本学術振興会特別研究員)
高木 ゆみ子 (元ブルジュエ工科大学非常勤講師)
中村 聡 (玉川大学教授)
中村 士 (放送大学客員研究員)
成田 守 (大東文化大学名誉教授)
南里 浩子 (東京国際大学非常勤講師)
林 裕 (カーブル大学客員研究員)
福田 俊昭 (大東文化大学名誉教授)
細井 浩志 (活水女子大学教授)
堀池 信夫 (筑波大学名誉教授)
町田 隆吉 (桜美林大学教授)
松本 照敬 (大東文化大学名誉教授)
三田 明弘 (日本女子大学人間社会学部文化学科教授)
矢ヶ崎善太郎 (京都工芸繊維大学准教授)
山下 克明 (国際日本文化研究センター共同研究員)
由川 稔 (ベネフル総合研究所企画部マネージャー)
依田 徹 (大宮盆栽美術館学芸員)
渡邊 義浩 (早稲田大学教授)
F.R. ジラルール (フランス東方学院教授)
E. ミルトン (駐日アイルランド大使館二等書記官)
M.C. ミリオール (イタリア国立サイレント大学教授)
C. ラフィン (ブリティッシュ・コロンビア大学准教授)

特別兼任研究員 (7名)

安藤 正士 (筑波大学名誉教授)
生田 滋 (大東文化大学名誉教授)
小島 麗逸 (大東文化大学名誉教授)
近藤 邦康 (東京大学名誉教授)
進藤 英幸 (無窮会東洋文化研究所所長)
中島 宏 (中国研究所研究員)
濱 久雄 (無窮会専門図書館長)

東洋研究所の理念・目的

東洋研究所の起源は1921年の貴・衆両院による「漢学振興二閣スル建議案」の決議に由来する。この背景にある基本的理念は、①漢学を中心とする東洋学術の研究、②東西文化の融合による新しい文化の創造をめざすことにあった。この理念実現の推進母体として1923年大東文化協会が創設され、研究組織として、①漢学を中心とする東洋学術の研究部門として東洋研究部を、②東西文化の融合による新しい文化の創造をめざす比較研究部を設け、教育機関として大東文化学院を設立した。この二つの研究部は1953年学校法人大東文化大学付属大東文化研究所に継承され、1961年学校法人大東文化学園の振興計画の一環として、新たに「東洋研究所」として過去の①・②の理念を継承している。

東洋研究所の目的は、学則第6条に基づく大東文化大

学東洋研究所規定によって定められ、「アジアを中心とする人文・社会・自然の科学的調査研究を行い、広く学術の発達に寄与すること。」とされている。当初研究局第一部人文科学系と第二部社会科学系の2組織がおかれ、その後専任研究員の就任に伴い人文科学班、政治・経済班、国際関係班の3班に分かれての研究活動に入った。時代の要請に従い個人研究はもとより、学際的・総合的共同研究の重要性を強調し、学際的メンバーによる研究部会を設け、研究成果を学術雑誌『東洋研究』に掲載するとともに、刊行物を発行し世に成果を問うている。また、研究成果を地域社会への還元として公開講座を開催し、国際交流の一環として、外国人講師による講演会等学術の発達に寄与することを目的に活動している。

(2014年7月)

2013年度 東洋研究所会議報告

■管理委員会

①日時：2013年5月9日（木）10:30～

場所：東洋研究所共同研究室

(議案)

1. 2013年度東洋研究所名簿・共同研究一覧について
2. 人事について
3. 東洋研究所予算に関する事項について
4. 2013年度 東洋研究所公開講座の実施について
5. 2013年度 東洋研究所出版計画について
6. 平成25年度「改善方策計画書・経過報告書」について
7. 徳丸研究棟東洋研究所研究室の使用について
8. 2013年度 東洋研究所の事業計画に関する事項について
9. 2014年度東洋研究所の共同研究計画書について

②日時：2013年12月4日（水）10:30～

場所：東洋研究所共同研究室

(議案)

1. 2013年度公開講座の実施について
2. 東洋研究所刊行物の発行状況について
3. 2014年度共同研究計画書(案)について
4. 東洋研究所管理委員会委員の推薦について
5. 東洋研究所研究員の人事について
6. 新しい自己点検・評価の実施に伴う「点検・評価シート」の作成について
7. 東洋研究所専任研究員への2014年度兼担依頼について
8. 東洋研究所専任研究員への専任教員昇格審査委員会委員委嘱について
9. 東洋研究所専任研究員海外研究員の帰国届について

10. 2014年度予算積算について

11. 2014年度研究員総会、国際交流(講演会)の実施について

12. 大東文化大学機関リポジトリ運用規定について

13. 故兵頭徹教授研究室の資料について

③日時：2014年2月15日（土）13:00～

場所：大東文化会館会議室

(議案)

1. 東洋研究所刊行物の発行状況について
2. 新自己点検・評価実施に伴う「点検・評価シート」について
3. 研究員総会および国際交流講演会について
4. 松方家資料について
5. 東洋研究所特任研究員(歴史資料館出向)の採用について
6. 東洋研究所管理委員の推薦について
7. 東洋研究所特任講師(歴史資料館出向)の兼担依頼について
8. 東洋研究所兼任研究員の辞退について
9. 2013年度(日本)イラン研究会(2014年3月29・30日開催)との東洋研究所研究部会共同開催について

■所内会議

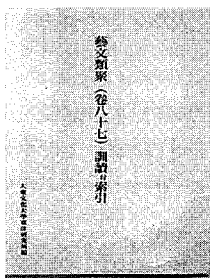
① 4月17日(水) 10:00～ ⑥ 10月23日(水) 10:00～

② 5月15日(水) 10:00～ ⑦ 11月20日(水) 10:00～

③ 6月19日(水) 10:00～ ⑧ 12月18日(水) 10:00～

④ 7月17日(水) 10:00～ ⑨ 1月15日(水) 10:00～

⑤ 9月18日(水) 12:30～ ⑩ 2月19日(水) 10:00～



『藝文類聚』(巻 87) 訓讀付索引

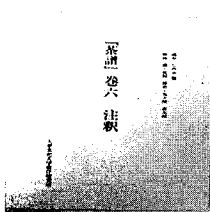
大東文化大学東洋研究所「藝文類聚」研究班 代表 中林 史朗

2014年3月31日発行／B5判 145頁／ISBN 978-4-904626-14-6／頒価¥6,000(税別)

『藝文類聚』は中国の類書の中でも早い成立に属する類書で、日本文学への影響は計り知れないものがある。本書はその『藝文類聚』を巻ごとに訓読文を施し、四部叢刊に採録されている作品については校異を付し、最後に利用者の便を考えて重要語彙索引を掲載したものである。

巻87は、「菓部下」の棗 杏 栗 胡桃 林檎 甘藷 沙菓 椰 枇杷 燕奠 榎 蒟子 枳椇 柚 木瓜 杜梨 芋 楊梅 蒲萄 檳榔 荔支 益智 榘 芭蕉 甘蔗 瓜を収録している。

《既刊》 巻1～巻16、巻80～巻86



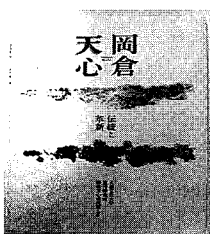
『茶譜』巻6 注釈

藏中しのお編 相田 満・安保 博史・矢ヶ崎 善太郎共著

2014年3月21日発行／B5判 298頁／ISBN 978-4-904626-15-3／頒価¥11,000(税別)

『茶譜』全18巻は、茶道流派の生成がきざし始めていた寛文年間(1661～1673)頃の成立とされ、茶道全般におよぶ総合的な類聚編纂書である。各項目について、千利休流・小堀遠州流・古田織部流・金森宗和流等、流派のちがいを対照的に提示しつつ、茶の湯や茶室にかかわるさまざまな記事を類聚編纂した茶道百科事典ともいべき性格を備えている。

《既刊》 巻1～巻5



『岡倉天心 伝統と革新』

大東文化大学東洋研究所・岡倉天心研究班

(正式名称: 岡倉天心(覚三) にとっての「伝統と近代」) 代表 田辺 清

2014年3月28日発行／B5判 130頁／ISBN 978-4-904626-16-0／頒価¥6,000(税別)

本書は2012年4月に発足した「天心研究班」の研究成果を初めて発表するものである。天心を曾祖父に持つ岡倉登志大東大名誉教授の論考を筆頭に最年少の依田徹氏に至る8名の研究者が各自の専門性を生かしながら天心研究の新たな方向を模索しており生誕150年・没後100年を過ぎた天心の実像を、それぞれに明らかにしているといえよう。本書で生じた、さまざまな課題を更に次の段階で考察・展開していくことも既に検討しつつある。

この他の東洋研究所刊行物についてはP8・9の東洋研究所出版目録、またはホームページをご覧ください。

刊行図書取扱店

■汲古書院

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-5-4

TEL (03) 3265-9764

■池上書店(大東文化大学板橋校舎内)

〒175-8571 東京都板橋区高島平1-9-1

TEL (03) 3932-7567

■進明堂(大東文化大学東松山校舎内)

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿560

TEL (0493) 34-4430

大東文化大学東洋研究所所報 No.61

2014年6月30日発行

編集・発行 大東文化大学東洋研究所

〒175-0083 東京都板橋区徳丸2-19-10

TEL (03) 5399-7351 FAX (03) 5399-8756

E-mail: tokenji@ic.daito.ac.jp

URL <http://www.daito.ac.jp>

印刷 (株) 東京技術協会